深江文化村ゆかりの音楽家の演奏記録について

研究員　有吉康徳

「生活文化史」五一号では、「深江在住音楽家の演奏記録について」ということで、一九三六年六月十四日に大阪朝日会館で行われた京大オーケストラ定期演奏会のパンフレット（以下「一九三六年パンフレット」という）を紹介した。このたび、一九三六年パンフレットを寄贈いただいた芦屋市にお住いの田中千尋さんから、新たに深江文化村にゆかりのある人物の演奏会のパンフレット資料を、二点寄贈いただいたことから紹介する。

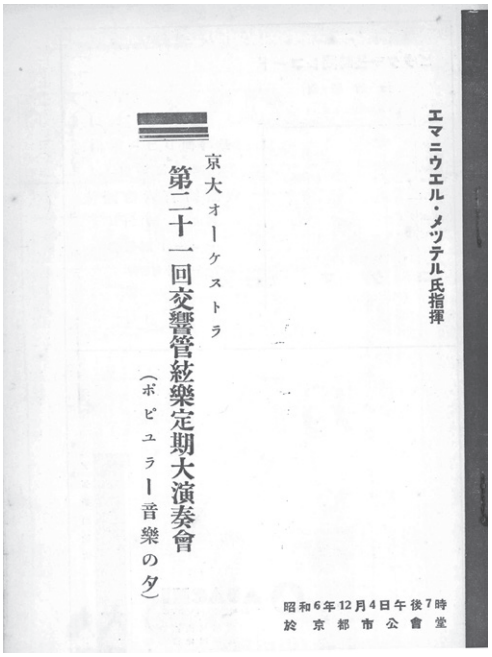

エマニウエル・メッテル氏指揮
京大オーケストラ
第二十一回交響管絃楽定期大演奏會
（ポピュラー音樂の夕）
昭和6年12月4日午後7時
於京都市公會堂

図１　京大オーケストラの
第 21 回定期演奏会パンフレット

一点目は一九三一年十二月四日に京都公会堂で行われた京大オーケストラ第二十一回交響管弦楽定期大演奏会のパンフレットである。指揮者はエマヌエル・メッテルだった。メッテルの略歴については「生活文化史」五一号において紹介しているため割愛するが、一九三三年版の『音楽年鑑』において、メッテルの居住地は「中山手通二の三六の七」と記載されていることから、この演奏時はまだ深江文化村に居住してなかったことがわかった。後に指揮者として名を成す朝比奈隆がヴィオラ奏者として出演している。朝比奈は前回紹介した一九三六年の京大オーケストラの定期演奏会ではヴァイオリンで出演していた。

また、このパンフレットは曲目だけでなく、曲目の解説、エッセイ等、様々なことが二〇ページ以上にわたって掲載されてい

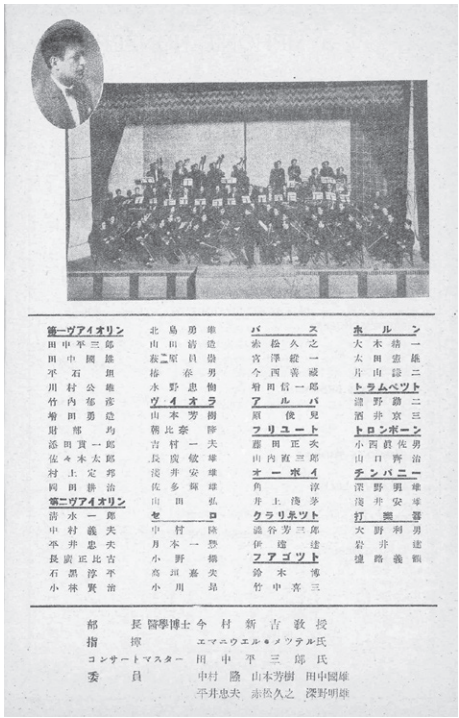
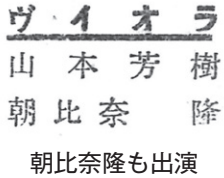


図２　出演者一覧



朝比奈隆も出演

るが、このうち京大オーケストラの一九三一年の十一月二日から十二月二日までの活動を紹介している「ジンタの日記」というコーナーが興味深かったことから一部抜粋する。

十一月二日（月）第二十一回定期演奏會を公會堂で開く。満員の盛況なり。會後四條八百政にて慰労會を催す。席上、親爺（メッテルのこと）に「何か一つ」とテーブルスピーチを求めむれば、曰く「わたし怒る事よりほか何も知りません。まだあります。皮肉」と。蓋し、遜辞なりと雖も、又至言ならんか。

メッテル自身も厳しい指導を自覚していたことを示す一方、学生たちはメッテルを「親爺」と呼び、敬愛している様子がうかがえる記載である。

図３　トリオアーベントのプログラム

二点目は一九三四年六月一日に大阪の朝日会館で開催されたトリオアーベントのプログラムである。ピアノは荒木和子、ヴァイオリンはアレクサンダー・モギレフスキー、チェロは一柳信二と記載されている。

アレクサンダー・モギレフスキーは一八八五年に現在のウクライナのオデーサに生まれた。ロストフの音楽学校とモスクワ音楽院を卒業後、ヨーロッパで活躍したヴァイオリニストである。一九二〇年代後半に来日し、東京音楽学校などで教鞭をとり、一九五三年に日本で亡くなった。モギレフスキーは、深江の文化ハウスをたびたび訪れたアレクサンダー・ルーチンの異父弟にあたるとされる。拠点は東京であったが、ルーチンが住んだ神戸にも足を運び、深江文化ハウスの前で弟子の諏訪根自子や宮本政雄と一緒に撮影した写真が残されている。

ピアノの荒木和子は一九一一年生まれで、一九二九年にドイツに留学し、一九三三年に帰国後、関西を代表するピアニストとして活躍した。戦後は国立音楽大学や熊本音楽短期大学の教授を務めた。兄弟の荒木元秋は、エマヌエル・メッテルの指導する京大オーケストラに所属しており、昨年寄贈いただいた一九三六年パンフレットにおいて、第二ヴァイオリンの演奏者の中に名前が掲載されていることが判明した。

チェロの一柳信二氏は、一九〇二年生まれで、神戸二中を卒業後パリに留学していた。一九三三年版の『音楽年鑑』では住吉村に居住していたが、一九三九年版の音楽年鑑では住所が渋谷区に変わっており、この間に東京に転居したようである。一柳信二は、音楽家だけではなく詩人として著作も残しており、